
異世界の旅人

ミツウロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の旅人

【Nコード】

N6415R

【作者名】

ミツウロコ

【あらすじ】

ごくごく普通の高校3年生、神無月かんなづき悠ゆうはふと呟いた言葉により、異世界に飛ばされてしまう。異世界で日々、奮闘する話です。

プロローグ1（前書き）

物語を書くのに関してはまったくの素人なのでアドバイス等がありましたら、お教えください。

プロローグ1

僕は今、真っ白い空間でお爺さんと話をしています。

何故、こんな状況に陥ってしまったかというところ、事のはじめは今から数時間前に至ります。

――数時間前――

「あーあ、今日一日、学校疲れた〜。」

僕の名は神無月 悠 《かなづき ゆう》、ごくごく普通の高校3年生である。

一週間の終わりである金曜日を終えて、今、帰宅している。

「あー、なんか暇だな〜。なんか面白いこと起こらないかな〜。」

なんとなく眩いていると

「あ、あれ？」

自分の足から地面を歩いている感覚が消えた。そして、空を見ると夕焼けによつて赤く染まった青空が離れていった。そして、今の自分の状況を直ぐに理解した。

「僕、落ちている？」

僕は自分が黒く底の見えない落とし穴に落ちていった。

プロローグ2

「う、ううん。こゝここは？たしか変な黒い穴に落ちたと思ったんだけどな」

僕はたしかに黒い穴に落ちた。だが今いる場所は真っ白い空間になっている。

「いったいどうなっているんだ？」

『おお、やっと目が覚めたか』

突然、自分の後ろから声がしたため振り返ると杖を持った白髪のお爺さんが立っていた。

「あんた誰？というかここ何処？」

『初めて会った人に「あんた誰？」とは失礼なやつじゃの。わたしは神様じゃ！』

「……はい？」

この時、僕は一瞬だけ思考が停止した。

(この人は何を言っているんだ？もしかしてこの人、頭がいつちやつてるのか？うん、きっとそうだそうに違いない。)

『人を勝手に障害者扱いするなー!!』

「うわー!!び、びっくりさせるなよ爺さん。てかなんで僕の考え
ていることがわかった?」

『人を障害者扱いしおつて。わしが何故心を読めるか?さつきから
わしは神様だと言っているじゃろうが!』

「ま、まじで?」

『ああ、まじ、大まじじゃ。』

「へえ〜。じゃあ、あなたが神様だということはわかったのでなん
で僕がここにいるんですか?」

『それはおぬしが面白いことが起きないかと言ったから、その願い
を叶えてやろうと思つてな。もちろん、わしの善意じゃ。』

「えっ、僕があの時言つたから?」

『そうじゃ。』

「じゃあ、何か欲しいものくれたりするの?」

『いや、君には異世界に言つてもらつ。』

「異、異世界!??つて、どんな世界ですか?」

『そうじゃの〜、魔法が存在する世界じゃな。』

「え！まじで？やったー。おもしろそー。」

『喜んでくれて何よりじゃ。でこのまま異世界に行くのは危険じゃろつからおぬしに3つだけ特殊能力を与えてやるつ。ちなみに身体能力と魔力に関してはあちらの人の平均値よりは高いから、その点については安心しなさい。』

「じゃあ、一つ目はだいたいの魔法を使えるようにしてください。特に黒魔法、あつちでは闇魔法というのかな？まあ、それを主にお願ひします。」

「で2つ目は自分の周りに多重式の障壁を張ってもらえますか？ぼくはあまり戦闘が得意ではないので。」

「3つ目は顔が隠れて、裾が地面につきそうなくらい大きくて物理的攻撃の耐性を強く持つ黒いローブを一着ください。これで以上です。」

『しつつかし、要望が多いの〜。』

「ははは、すみません。」

『まあいいわい。そして、これから異世界に行ってもらおうと思っんだが心の準備はいいかの？』

「はい、大丈夫です。」

『じゃあ、頑張つてな〜。』

神様がそう言った瞬間にまた僕の足元に黒い穴が空いた。

「えっ、ま、また〜!？」

悠の体は穴の中に落ちていった。

『これからの成長が楽しみじゃわい。ふおっふおっふお。』

再び静かになった白い空間に老人が一人呟いた。

プロローグ2（後書き）

初めてこんなに長く書きました。

小説の書き方や文章構成、言葉遣いなどで変な部分があると思いますがそのときはアドバイスを頂けると嬉しいです。

1話 異世界に到着！

黒い穴に落ちたと思うとすぐに周りが白くなり、気付いたときには薄暗い森にいた。

「ふう〜。到着したか。意外にあっという間だったな。ん？なんだこれ？」

足元には頼んだロープと小さな袋、そしてB5サイズくらいの紙が一枚落ちていた。

「えーと、なになに。」

紙にはこう書かれていた。

『おお、これを読んでいるということは無事に到着したようじゃの良かった良かった。ほれ、頼まれていたロープじゃ。いろいろものが入るように改良しといてやったぞ感謝すれよ。あと身体能力と多重式の障壁については完了しておるから安心なさい。』

じゃあ、あとは頑張るのじゃよ〜。ふおっふおっふお。』

「なるほど、でこの袋が路銀ということだな。」

袋の中には500円サイズの硬貨が金2枚、銀5枚、銅が20枚入っていた。

「じゃあ、まずはこの森を抜けますか。」

そして悠は森を進んで行った。

1話 異世界に到着！（後書き）

3話目を投稿しました。

これで異世界への旅立ちが完了しました。やっと次回から戦闘シーンにはいることができそうです。

2話 早くもピンチ到来！？（前書き）

今回、バトルに入ると前回の最後に報告したのですがいざ書いてみるとギリギリバトルに入ることができませんでした。本当にすみません。

次回は必ず入ります。

2話 早くもピンチ到来!?

僕は薄暗き森を突き進んでいるとふと自分の格好についてあることを思っていた。

(これ僕、不審者じゃね!?このまま人前に出てもいいのかな?)

などと心配していると自分は青空が見える広場にでていた。

「ここは森のどの辺りだろう?まだ抜けないのかな?」

「…………お…………お…………い」

「ん?」

「…………お…………い…………き…………す…………ひ…………ろ」

「やっぱり何か聞こえるな。なんだろう、誰かが向こうで叫んでいるぞ?」

なにやら遠くで鎧をきたひとが自分に向かって叫んでいるが全く聞

こえないため、こちらから手を振ってみるとジエスチャーで僕の後ろを指を差してきた。

「えっ？後ろ？」

恐る恐る後ろを振り返ると後ろには全長3メートルはするであろう巨体を持つとかげもどきが僕の方を見ながら舌なめずりをする光景があった。

「…………ギヤオオオン！！」「う、うわぁ！」

(ヤバイヤバイヤバイ、これは非常にヤバイ。えとどうしよう!?)
すると後ろから鎧を着た人が駆けてきた。

「君、大丈夫か!？」

「は、はい、なんとか。」

「そうか。じゃあ、今からこいつを倒そうか。」

「に、逃げないんですか!？」

「無駄だよ。こいつはグラニクスと言ってね。馬車でさえ、こいつの足には適わないんだ。それにほら、選択の余地もないみたいだよ。」

グラニクスを見ると鼻息を荒くしながら突進をしようとした。

「私は前衛を担当するから君は後衛で私の援護を頼む。それじゃあ、行くぞ！」

「はい。」

2話 早くもピンチ到来！？（後書き）

〓〓モンスター情報〓〓

グラニクス

全長 3〜4メートル

体重 平均150？

ランク E

深い森や洞窟などに生息しており、主に肉を食べている。気性が荒いうえに素早さが特に高いためにグラニクスの討伐部隊を作ることもある。出くわした際には甘く見ず注意して戦うと良い。
弱点は頭。

3話 早くも戦闘終了！？王都に向かう

「フレム！！」

僕は鎧の人に教わった炎の魔法をグラニクスに向けて放つ。魔法は確実に命中しているがグラニクスの動きは鈍くなるどころが徐々にスピードが上がっている気がする。

「くっ、なんて硬い鱗なんだ傷一つ付かないなんて。」

「駄目だ！そのような魔法でやつの胴体を狙っても、かすり傷をつけることもできない。頭を狙ってくれ、そいつの弱点は頭なんだ！よろしく頼「ブウウン！」ぐはあ！！」

鎧の人はグラニクスに剣で立ち向かいながら、僕に答える。が、鎧の人の気が自分に向いた一瞬の隙にグラニクスの尻尾が素早く動き、鎧の人の体を大きく弾き飛ばした。

「バアアン！ぐっ！ドサツ。」

弾き飛ばされた鎧の人は体を木に体を打ちつけて気絶した。

「……えっ？だ、大丈夫です、か？」

僕は鎧の人に問いかける。が、返答はない。

(どうしよう？鎧の人が倒されちゃった。何をしたら、いいんだろ
う！？僕まだ何も魔法知らないのに。)

するとグラニクスは鎧の人を倒したことを確認し、次は自分の方へ
走り出した。

「くそ、もうやけくそだ。てきとうに知っている漫画の術を唱えて
やる！」

そして僕は『魔法 生ギま！？』の魔法を放った。

「百の影槍！！」

魔法を唱えると僕の影から薄い板のようなものが無数に高速で出て、
突進するグラニクスに向かって行って、グラニクスを串刺しにした。

「ギャオン！ギャオン！ギャオオオオン！！！」

（まだ動くだど！？なんて生命力だ！？じゃあ、今度はこれだ。）

「千の影槍！！」

また同じように唱えると先ほどの無数の影槍の倍以上もの影槍が暴れるグラニクスに降り注いだ。

グラニクスの声がるさいため、耳をふさぎ、目を閉じているとすぐに声が小さくなって、辺りは静かになっていた。

「……もう終わったかな？う、うわっ！！」

僕が目を開けると目の前には生き物だったとは認識ができないほどにまで原形を留めていないグラニクスの残骸があり、辺り一面に血の臭いが充満していた。

「グロいな。まさかやけくそで言った『魔 先生ネギ ！？』の魔法が発動して、これほどの破壊力を産むとはな。ボスポラスの力
ゲ ロウ恐るべし！」

（この魔法は今後、使用しないほうがいいな。人前で放つと確実に騒ぎになるだろうし、僕もバグキャラみたいになりたくないしな。）

この時、僕は現実世界の漫画やアニメに出てくる技の使用を禁止した。

「そういえば何か忘れているような？あ、そうそう鎧の人が大丈夫か確かめないと！」

鎧の人は先ほど叩きつけられた木の根元に気絶して倒れていた。

「大丈夫ですか？もしも？」

「う、ううん。」

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。はっ、そういえばあのグラニクスはどうした！君は怪我していないのか！」

「グラニクスは御覧の通りです。そして私に怪我はありません。」

「あ、あのグラニクスを君が一人で勝ったのかい？それも怪我をしないでなんて本当なのか！いたたたた。」

「えっと、そんなことよりあなたが怪我しています。とりあえずどこかひとがいるところまで行きましょう。」

「ああ、そうだな。それなら、すぐそこに止めてある私の馬を使おう。この森から北に5キロのところには王都があるから、王都に向かう。」

「そうですね。では行きましょう。」

3話 早くも戦闘終了！？王都に向かう（後書き）

今回は戦闘に入りましたが初めての戦闘シーン書きだったので自分で読み返してみたのですがパツとしませんでした。

次回は鎧の人との会話です。

4話 鎧の人との会話

「いてててて、ケツがいてえ。そして酔ってしまいそう・・・だ。」

僕は今、王都で鎧の人を治療するために馬を走らせています。でも現代の普通高校生である自分が乗ったことがあるわけもなく、このようなケツ痛と乗り物酔いのW攻撃にノックアウト寸前になっていたのです。

「君は馬にも乗ったことがないのかい!？」

「はあ・・・い。すみません。」

「じゃあ、一度休もうか?ちょうどもう少しで森を抜けるところまで来ているからさ。」

「は・・・い。お願いします。」

それから数分後、休憩用の山小屋と『王都はこちら』と書かれた簡素な看板が見えてきた。

「じゃあ、ここで休もうか。ああ、馬はその太い柱に縄でくくりつけておいてくれ。」

「はい。わかりました。」

山小屋のなかにはベンチから暖炉、そして水を汲み上げるポンプがあ

る非常に居やすい空間だった。ポンプがあることに気づいた僕は凄いスピードで水を汲み上げて、両手いっぱいにくっつけたそれを一気に飲み干した。

「「ごくっごくっごくっ、ぶはー生き返る！」」

飲み終わり、僕達はベンチに腰を下ろした。そして少し時間が経ってから鎧の人が口を開いた。

「そういえば私たちはグラニクスとの戦闘から行動を共にしてきたけど自己紹介がまだだったな。」

「ああ、そういえばそうですね。」

(どうしよう？なんて答えよう？流石に「異世界から来ました！」なんて言ったら、絶対に引かれるよな)。じゃあ、鎧の人の紹介パターンをまねてみるか。)

「じゃあ、今、自己紹介をしよう。」

俺の名前はベルムだ。年は21。王都で騎士団の隊長をしている。俺は敬語で話されることが苦手だから普通の口調で話してくれて構わない。俺の紹介は以上だ。次はお前の番だぞ。」

「私の名前は神無月かんなつき 悠ゆうという。年は18。今は旅をしている。口調などはあまり気にしないから大丈夫だ。これで以上だ。」

「おおー。」

「どうかしたか？」

「いや、今まで敬語でずっと話していたやつがその口調に変わると

「ここまでカツコよくなるんだなと思ってさ。」

「え？そんなにカツコよかったですか？」

「ああ、ほら口調に戻っている。」

「おお、本当だ。」

「うーん、そうだな。俺はさっきの口調の方がいいと思うからな。そうだ、ユウは私と話すときはさっきの口調で話せよ。」

「わ、わかった。」

「あと1つ聞きたいことがあるのだからいいか？」

「特に構わないが。」

「ユウは何故旅をしているんだ？」

「!?!?」

(うおっ！やべえ。旅をしていることには変わりないが旅をする目的を考えていなかったー!!！)

「あー、それはだな。旅をすることで……。」

「で何だ？」

「自分を鍛えようと思ったからかな。」

(うわー、話のノリでよくありそうな理由を言っちゃったよ。大丈夫かな?)

「うーん、まあ魔法使いは遠距離からの攻撃だから体が弱いからな。実際にお前も体が弱そうだな。」

「まあ、そういうことだよ。」

「でその旅の途中にあの森にいたってわけか。」

「あ、ああ。」

「まあ、何であれ俺はお前に命を救われたわけだ。ありがとな。あとこれから王都に向かうがよろしくな。」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。」

4話 鎧の人との会話（後書き）

これまで登場してきた鎧の人ことベルムさんを悠との会話で紹介させていただきました。

ベルムさんは明るく気軽に話せる性格の人という設定になっていきます。

すぐに気づいた人がほとんどだと思うのですが自己紹介の前後で私
俺に変わっているのは仕事上では『私』、プライベートでは『俺』
、と自分のことを表しているという意味です。分かりにくくすみません。

5話 王都と再開

山小屋を出てから数十分、自分たちは森を抜けて王都への道を進んでいた。ケツの痛さはまだあるが乗り物酔いは風を切る心地よさにより、和らいでいるため前より動きやすいと感じていると遠くに壁と思わしきものが見えた。

「おい、ベルム。あの壁のようなものは何だ？あれが王都なのか？」

「ああ、そうだ。あれが王都だ。そしてあのユウが壁と言ったものは王都の防壁だ。」

防壁の目の前まで来てみるとその大きさに驚いた。防壁は現実世界の凱旋門程の高さをしている、長さは王都の門から見てもその端が地平線の先に消えており、中国の万里の長城を見ているかのように思えた。

「大きいなー。流石は王がいる国なだけあるなー。」

「そりゃあ、そうさ。王がいるのに防壁がなかったら、いくら俺たち騎士団強かろうと突然敵襲に遭ったら直ぐに陥落してしまうかもしれない。」

「ふうん。」

「わかったら王都に入るぞ。」

「わかった。じゃあ、行くか。」

そう言うとベルムは門の左側にいた兵士に声をかけた。

「おい、王都に入りたいんだけど大丈夫か？」

その呼びかけに一人の兵士が応じた。

「あなたはベルム殿！ご無事だったのですか？長く戻られないために皆さんどれほど心配なされたか。」

「ああ、分かってる分かってる。見てのとおり俺はピンピンしているから心配するなって。それはそうとして入っても大丈夫か？」

「はい！ベルム殿は問題なしなのですが……そちらはお連れの方ですか？」

「ああ、そうだ。こいつは俺の……そうだな友達といったところだな。」

「そうですか。ベルム殿のお知り合いでしたら安心です。どうぞ、中へ。」

（今の兵士の対応と周りの人間に大きく心配されていることから見て、もしかしたらベルムは凄い人なのかもしれないな。）

王都に入ると中は活気に溢れていた。市場は商人たちが店を構え、人々がものを買うという当たり前のことであつたが双方が眩しいほどの笑顔で接しているのはただ単に仲がいいというだけではない気がした。

これがこの国の王の力なのだろうか？と思っているとベルムが声をかけてきた。

「おい、ユウ。」

「ん？ああ、何だ？」

「大丈夫か？何か考えていたみたいだが。」

「いや、何でもないさ。で、何だ？用があつたから話しかけたんだろっ？」

「今から俺の仲間の騎士団のところに行こうと思つてな。この王都のことも説明しないとならないしな。どうだ、行くか？」

「ああ、行かせてもらおう。」

騎士団の仲間はずぶんこの時間はいつも行きつけの酒場にいるらしく、自分たちは酒場へと足を進めた。歩き出してしばらくすると剣が交わるマークのついた建物が見えた。

「おい、ベルム。この建物何だ？武器屋か？」

「ああ、ここか？ここはギルドだな。」

「ギルド？」

「そうだ。ギルドというのは人々から依頼されたことを報酬と引き換えに引き受ける集団のことだ。そのなかでもここは傭兵ギルドで魔物などの討伐などを主に仕事とする強い戦士たちが集まる場所だ。ギルドといえば他にも魔術師ギルドや商人ギルドなど多種多様だ。」

「ほう、ギルドか。」

「まあ、ユウはこのギルドとは一生無縁だと思っぞ。」

「そうだな。」

その後もベルムと共に王都を巡り、例の酒場に着いたのは火のごとく朱く燃える空が海のごとく蒼き夜に包まれ始めているところだった。

「すっかり遅くなってしまったな。」

「私のためにすまないな。」

「気にするなって。俺が案内してやるって言ったんだから、気にするなって。」

「そうか。ならいいんだが。なあ、ベルム。」

「何だ？」

「話は変わるんだがベルムの仲間の騎士団って、どんな奴らなんだ？少し気になってな。」

「なんだそんなことか。そうだな、簡単に説明すれば面白いやつばかりだな。」

「面白い？」

「ああ。だが今の俺のいない環境で大丈夫なのが心配だな。あいつらは俺がいないとダメな奴らだからな。」

「だがそんなにも面白いメンバーなら大丈夫なんじゃないか？」

「大体は大丈夫なんだがただ一人副隊長のセインがな……。」

「副隊長ほどの人なら大丈夫さ、心配するなよ。」

「そうだといいいんだけどな。じゃあ、そろそろ酒場に入るか？」

そついうとベルムと自分は酒場の入り口をくぐった。

視点 セイン

「ああ、どうしよう。ベルムがいなくなるなんてそれも今の時期によりよって、あの森で。」

「まあまあ、セイン副隊長、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。」

「そうですよ。きっと隊長ならひよっこり帰ってきますよ。」

「はは、心配しなくても大丈夫なんて思えるはずがないだろうが！
！じゃあ、アリアとカル口は心配じゃないというのか？」

「あのベルム隊長ですからきっと大丈夫ですよ。」

「アリア、私はあのベルムだから心配なんだ！」

「でもセインさんは心配し過ぎです。もう1日中こんな感じじゃないですか少しは水でも飲んで落ち着きましょう。はい、水です。」
「ああ、そうだな。ありがとう、カル口。はあ、ベルム早く帰って来ないかな。私がおかしくなりそうだ。」

悠 視点

自分らが中に入ると中は冒険者や魔術師、商人に兵士まで年齢差や性別に関係なく、カウンターやテーブルで酒を飲んで盛り上がっていた。そのなかで右端のあるテーブルのグループただ一つだけが魂の抜けたかのように暗かった。

「お！いたいた。やっぱり暗い顔をしているな。」

「あのグループなのか？」

「ああ、あのグループさ。じゃあ、そろそろ俺は無事であることを伝えて楽にさせてやるか。」

そう言うとベルムはそのテーブルに近づいて声をかけた。

「よう！しけた面してんな。大丈夫だったか？セイン。」

「……！！べ、ベルム？」

「おう！俺以外に誰に見えるんだよ。」

「うう、心配したじゃないか。どこをほっつき歩いていたんだよ？」

「ちょっと森で迷ってしまってな、すまんすまん。」

「まあ無事でなによりだな。で、そちらの人は？」

「こいつは俺の命の恩人だ。詳しくはテーブルで酒やなんかでも飲みながら話しようや。」

そう言われて自分は空いている椅子に腰をかけた。

6話 4人の騎士団

「ベルムの無事帰還を祝してカンパニー！」

「カンパニー!!!」

自分は椅子に腰をかけてテーブル上のグラスに注がれたオレンジ色の液体でベルムの騎士団のセインさんと金髪の女性と緑色の髪の男性と乾杯を交わした。謎のオレンジ色の液体は甘味があつてとても飲みやすかつたため半分くらいも飲んでしまった。

「プハー！やっぱりこれはから苦くてうまいな。」

（苦い？こんなに甘いのに・・・同じ飲み物だよな？それともベルムの味覚が本当の味で自分の味覚は狂っているということなのか？）

こちらが勝手な想像で頭を悩ませていたら、セインさんが話かけてきた。

「さてと悠くんだったかな？ベルムから詳しい話は聞かせて貰った。改めてお礼を言わせてもらう。ありがとう。」

「いえいえいえ。こちらこそベルムがあの場合にいなかったら、私も背後からやられていたのでお礼などとてもないですよ。」

自分がそう答えるとベルムから向けられている視線に気がついた。ベルムを見ると手でgoodと表しながら笑みを浮かべていた。

「そうかい？君がそう言うのであればいいんだが……。」

笑みを浮かべているベルムをセインさんが睨みつけると視線に気づいたベルムはロボットののような動きで当初の姿勢に戻った。

「君がそう言うのであればいいんだが、それではわれわれ3人の怒りがおさまらないため、後日にお仕置きすることにしたのだがいいかな。」

この考えに対して金髪の女性と緑髪の男性も賛成と答えた。

後日お仕置き予定のベルムは最後の望みをかけて自分に目からキラキラ光線を浴びせてきた。この言動に気づいたセインさんは自分に言った。

「なお、悠くんがこれの中止を求めるのであれば悠くんも一緒にお仕置きを受けて貰うからね。」と悪い笑みを浮かべて言い放った。

この言葉によって自分が選べる選択肢は『賛成と言い、ベルムの醜態を楽しそうに見る』か『反対と言い、ベルムとともに醜態を晒す』のどちらかだったがその割合は99：1であった。

「さ、賛成させていただきます。」

この時、何かが崩れる音が聞こえた気がした。

「そうかそうか賛成してくれるか。じゃあ、ベルムはお仕置き決定！」

ベルムが頭を抱えながらブツブツ呟いているのをスルーしながらセ

インさんは話しはじめる。

(ベルムよ、すまない。君のことは忘れないよ。)

「お！今思うと自己紹介がまだだったな。私の名はセインだ。年は22。この隊の副隊長をやっている。呼び方は自由に構わないぞ。」

セインさんの自己紹介のあとに金髪の女性と緑髪の男性の自己紹介が続く。

「私はアリア。年はナイシヨよ。呼び方はアリアさんかお姉さんって呼んでくれると嬉しいな。」

「私はカル口。年は19。呼び方は呼び捨てでいいよ。よろしく。」

「この4人がメンバー全員だよ。よろしく。」

「よろしくお願いします。って、ええっ！騎士団なのにたったこれしかないんですか？」

「ああ、そうだが。悠くんはベルムから何も聞いていないのかい？」

「はい、何も。」

セインさんはベルムを再び睨みつけ、大きく溜め息をついた。

「我々は騎士団なんだが騎士団じゃないんだよ。」

……はい??

「分かり易く説明すると我々は王都第四聖騎士団に属しているが我々はその中でも少ない人数で騎士団本隊が扱うことができない任務を遂行する小隊なんだ。」

「へえ〜。でもそんな大事なことを自分に伝えていいのですか？」

「君はベルムが友達と認めた人だからさ。」

「あーなるほどそういえばそうだったな。」

「理由を理解したようだね。君の言うとおりにこのことは知られてはいけないことだから他の人にはこのことを漏らさないでもらいたい。」

「わかりました。」

「ところで悠くん。悠くんは旅人だと聞いたのだけどこれから行く場所は決まっているのかい？」

（あー何も考えていないや。ここは正直に。）
「いえ、まだ特に決まっていませんよ。」

「そうか。ならば我々と一緒に来ないか？」

「……え？……なにこの展開？」

この言葉はアリアも予想していなかったのか大きく反論し、カルロはそれを止めた。

「セイン！あんた、何も関係ない民間人を任務に巻き込んでどうするつもりなの！何かあつてからじゃ遅いのよ！」

「まあまあ、アリア。落ち着きなよ。きつと副隊長にも何か考えがあるんだから、ですよね副隊長？」

「もちろんだよカルロ。まず理由1、先ほどベルムから聞いた話では森の中でグラニクスに遭遇した際に無傷でそれも1人でグラニクスを倒したらしいからだ。」

ここでカルロはセインの言った言葉の妙な点に気がついた。

「あの〜。倒した『らしい』とはどういうことですか？隊長は悠さんと同行していたんですよね？」

「同行していたことは同行していたんだが戦闘中にグラニクスに不意をつかれて気絶をしまつて、肝心の倒したところを見ていないらしいんだ。」

聞いたカルロとアリアは額に手をあてた。

「確かに本当に倒したかどうかはわからないけど自分が見たところ彼はとても普通の人とは思えないほどの魔力を持っているから正しいと思う。それに我々は人数が少ないんだ。4人よりも5人の方が心強いだろ？」

「わかりました。副隊長がそこまで言うんでしたら、私も賛成します。アリアもいいよね？」

「わかったわよ。でも何かあつても知らないからね。」

「大丈夫だ。私に任せなさい。どうだろう？悠くん。」

（うーん、どうするか。行くところがないというのも事実だ。そして自分はこの世界のことを全く知らない素人であるわけだからベルム達に守ってもらうことができる。）

自分にあるメリットは安全に他の国に行けて、この世界の情報収集&ベルム達の任務を共に遂行による戦闘経験の蓄積が見込められるな。）

「では私もその任務に参加します。」

「そうか！じゃあ、出発は2日後の夜明けの刻に王都の入り口にて集合だ。長旅になるから準備を怠るなよ。わかったか？ベルム。」

セインさんに呼ばれたベルムは最初はぼーっとしていたがセインさんから放たれた眼光で猫のように飛び上がって返答した。

「お、おう。わかった。悠、じゃあ明日一緒に武器屋とか行こうぜ。」

「ああ、そうだなあ。ふあああ。なんか眠いな。そう・・・いえば自分はどこにい寝れば・・・。」

ここで自分の意識は途切れた。この後、ベルム達が悠を運ぶのに苦労したことは言うまでもない。

6話 4人の騎士団（後書き）

新しく登場したセイン、アリア、カルロはベルムの同じように活動報告で詳しく説明します。

7話 朝の出来事(前書き)

ミツウロコです。(´・`・´)

うまく書けなかったためしばらく更新が出来ませんでした。
これからは前のペースを取り戻したいと思います。

7話 朝の出来事

昨夜、酒場で意識がなくなった悠は輝く太陽の光と鳥のさえずりによって目を覚ました。

チユン・・・チユンチユン

「ん・・・うん。眩しいいな。」

「ここはどこだろう?」

周りを見回すと天井から床下まで全てが木製で室内には大きめのテーブルと2つ椅子と壁に鏡が置いてあり、すぐにここが昨夜の場所ではないことがわかった。

「ああ、昨日は酒場で気絶してしまったんだっけな。」

ベルム達はどこにいるのだろうか?と考えながら容姿を確かめるために鏡で自分の顔を覗いていると自分が今までずっと深く被っていたローブのフードが取れて、黒髪の青年が映っていることに気がついた。

「そういえばこちら（異世界）に来てから一度も外したことがなかったな。」

今一度、こちらに来てから変化したという自分の顔や体などを確か

めてみる。だが特に筋力などに変わりはなかったが目に違和感があることに気づいた。

「あ、あれ？僕の目は黒だったはずんだけど………なんで緑？いや、翡翠色？なの？」

考えられることはただ一つ、あのお爺さん（本人曰わく神）しかない。何かこの目に仕掛けがあるのだろうか？などと様々な仮説を立てているとベルムの声が聞こえたとともに扉が開き、二人の目があつた。

「おーい、ユウ。そろそろ起きろよ今日は旅の準備があるんだから、よ？」

「……………」

「あれ？お前は誰だ！？ここはユウの部屋だぞ！」

（あつ！そうだった！ベルム達には自分の素顔を明かしていないんだつた！）

自分はいきなりのベルムの登場に内心驚きながらもフードを今までのように被り、冷静にベルムに対して言葉を返した。

「おお、そうだったな。ベルムには自分の素顔を見せていなかったな。（パサッ）これでどうだろう？自分だということがわかっただろ？」

「なんだユウだったのか、一瞬盗人かと思っただぞ。」

「悪い悪い。ベルムには顔を見せていなかったもんな。」

「本当だぜ。」

「それでどうした？何か言うことがあって部屋に来たんだろ？」

「ほら、昨日ユウがぶっ倒れる前に俺らの任務に同行するって言っただろ。その出発の準備を今日中にして、明日の朝一番にここを出るってわけだから今日俺はユウと準備をするために今迎えにきてやつたんだ。」

「そつえばそつなっていたな。」

「よし、わかっただらさっさと行くぞ。調達するものがたくさんあるんだからよ。」

「そつだな。じゃあ、行くか。」

(移動中)

「そういえばさ、ベルム。」

「ん？どうした？」

「昨夜、自分が飲んだあの液体は何だったんだ？ベルムは苦いと言っていたがこっちはすごく甘かったぞ。」

「液体？ああ、キュアドリンクのことだな。」

「キュアドリンク？それは何だ？」

「キュアドリンクはな、疲れている時には甘く感じて、疲れていない時には苦く感じる簡単治療薬なんだぜ。」

「そうだったのか。じゃあ、昨日眠くなったのは疲れていたんだな。」

「それもあるがあれは酒でもあるんだよ。」

「……酒……！？……酒！？な、なんで治療薬が酒なんだよ！」

「あれは酒だったのか！？どつりである時、気絶する前にくらぐらきたのか！」

「酒は少しなら薬になるっていうだろ。あと眠れないやつを眠らせる睡眠薬にもなるかららしいぞ。」

「だからって、自分に未成年に酒を飲まずなよ!!」

「未成年なんてなに冗談言っているんだよ。ユウは18だろ？未成年は16までじゃないか。」

(え、こっちではそうなのか!?)

「どうした？いきなり黙っちゃって。」

「ちょっと驚いていてさ。自分の国では二十歳まで酒は飲んではいけないという決まりになっていたからさ。早くから酒を飲んで病気になったら大変だしさ。」

「そうか。そりゃ、すまなかつたな。でも病気なら心配はいらないぞ。あれは治療薬でもあるから飲んだときに酒の飲み過ぎると危険な成分を分解してくれるんだ。だから飲んだとしても酔っぱらうだけだからな。」

「ふーん。そうなのか。」

(なるほどそんなものがあるのか自分がもといた世界の知識がここまで役に立たないとはな。ちゃんとこの世界のことを勉強しないといけないな。)

「お、やっと着いたな。まずは武器と防具、そして雑貨の順で買っていこうぜ。」

「そうするか。」

???視点

(輝く太陽、人で賑わう市場、この光景を何度見ただろうか。我が話をかけてもここにいる者共は能力の低い者ばかりで我の声など伝わるはずがない。早く我の声が聞こえる者が現れないものか。)

そんな時、市場内に強力な魔力の塊を感じた。

(むむ。なんだ!?この莫大な魔力は!?長き間この市場にいるがこれほどの魔力を感じたことがないぞ!この魔力の持ち主ならば我の声が届いて、我の望みを聞き入れてくれるかもしれない。そうと決まればさっそくコンタクトを取るとしよう。)

8話 武器屋に行こう

ベルムと共に人ごみの中を進むこと数十分、自分達の前に剣がたくさん置いてある店が見えた。

「ユウ、ここが武器屋だ。」

「へえ。ここが武器屋か。」

店をよく見ると剣から槍、杖の武器と鎧や盾などの防具まで数多く取り揃えてある。

「たしかユウは武器などを持っていなかったよな？」

「そついえばそうだな。」

「いくら魔法使いであっても魔力が切れることはあるんだから護身の剣やナイフを一、二本、あと魔法発動の補助や消費魔力の削減のために杖などを持っていた方が良いと思うぞ。」

「なるほど。だが持っていた方が良いことはわかったが自分に何が合うのかがわからなくて選びようが無いんだが・・・。」

「それなら心配はいらないぞ。」

そう言うとベルムは店の中に入っていき、しばらくすると体格のいい男の人を連れて帰ってきた。

「この人はこの武器屋のガバンさんだ。ガバンさんは武器屋歴30年のベテランでな、誰にどんな武器があっているのが長年の感覚

でわかる人なんだ。俺も武器のことではとても世話になっているだけ。」

「よう。君がユウか。俺がガバンだ、よろしくな。ベルムから話は聞いているからまずはユウの魔力を測定するぞ。」

「はい。お願いします。」

「よし。じゃあ、中に入れてくれ。」

店内に入るとガバンさんとその前に置いてある水晶のようなものが入った。

「これなんですか？」

「これは魔力測定器だよ。これで魔力の数値や色などを調べるんだ。」

「色、ですか？魔力に色なんてあるんですか？」

「そうだよ。魔力の色で火、水、雷、風、光、闇の六つの属性に分けることが出来てその色で自分の得意属性がわかるんだ。まあ、実際に測ってみようか。その水晶に手で触れてくれ。」

自分はガバンさんに言われたとおりに水晶に触れる。

「じゃあ、その水晶に魔力を流れ込ませるようなイメージで魔力を発してみてください。」

「こうですかね？」

水晶に触れたまま自分は魔力を発するイメージを試してみる。すると、体内に冷たい水が流れているような感覚がした後に水晶が光った。

「今、魔力を発する際に指先に向かって違和感があったと思うんだがどうだろうか？」

「はい。確かに冷たい水が指先に向かって流れているような感覚がありました。」

「そう。それが魔力の流れなんだ。その感覚は魔法を使う時に重要だから忘れないように。お、そろそろ結果が出るんじゃないかな。」

すると水晶が青白く光った後に透明だった水晶が黒く染まっていた。

「ん？こ、こりやまた珍しいのがきたな。」

ガバンさんの反応に自分とベルムも少し緊張する。

「何かありました？」

「ユウ、君の魔力の属性がわかったぞ。ユウの属性は……闇だ。」

「へえ。そうなんですか。そんなに珍しいんですか？」

今まで黙っていたベルムが呆れた声で話します。

「ユウ、お前は何も知らないんだな。この世界の六割が魔法の使える人だが、その中で使用の割合が高い順に火と水、雷と風、となっているが光と闇の割合は一割にも満たないんだ。だから闇はそれほ

ど珍しいと言われるわけだ。」

（こちらの世界に来る時に頼んだ黒魔術がこちらの属性でいう闇属性となっていてはな。そういや、どう魔法を使えばいいんだ？まだグラニクス戦で使ったフレムという火の玉を出す魔法しか知らないんだがな。）

「ベルムの言ったとおり光と闇は使用頻度極端に少ないため珍しくかつ使いこなすことが難しい。だから自分に合った武器でその難しい魔法を容易に発動できるように補助できて、本人の真の強さを引き出すことができるかが俺たち武器屋や鍛冶屋の腕の見せどころってわけだ。じゃあ、いまから武器づくりに必要な質問をするから答えてくれ。」

「は、はい。わかりました。」

数十分後

「よし！これで質問は終わりだ。明朝にはユウの武器が完成しているはずだから楽しみにしていてくれ。」

「お願いします。」

自分はぺこりと頭を下げると明日の朝がくるのを心待ちにしながらガバンさんの武器屋を出た。

悠がワクワクしているなかベルムは疲れた表情をしていた。

「おお、やっと終わったか。」

「待たせて悪かったな。」

「まあ、いいさ。それにしても人の武器を作るのを待つのがこま
でキツイことだとは思わなかったぜ。」

「そうだな。作っている側は楽しいもんな。」

「じゃあ、武器のことはガバンさんに任せて俺たちは道具屋に行く
か。」

「そうしよう。」

??? 視点

（我の元にくるか力ありし者よ。やはり我とそなたは通じ合うこと
ができるのかもしれないな。ふふ、そなたが我の前に姿を現すのが
待ち遠しいぞ。）

9 話 謎の老婆と封印石（前書き）

ははは、ミシウロコです。

金曜日と言いながらなんでしょうこの遅れ……。

でもいつもより長いから許して欲しいです。

9話 謎の老婆と封印石

ガバンさんの店を出ると太陽はいつの間にか真上にあり、先ほどよりも通りにいる人が多くなっていた。

普段道具屋に行くのにはさほど時間はかからないらしいが周りの人がそれを邪魔するかのようになり立ちふさがり、うまく進むことができない。

「あーやっぱりこの時間は多いな。」

「本当だな。でもベルム、それにしても多くないか？さっきでさえ結構な数いたはずだぞ。」

「いや、ここではこれが普通なのさ。ここは王都の中心部であり、たくさんの情報と物が行き交う場なんだからこれくらいは当然。むしろ少ない方が不気味だ。」

今思えばここは王都、王がいるのに物や情報が入らないはずはない。

「道具屋で何を買った？食料とかか？」

「それもあるが装飾品とかも買おうと思ってな。」

「え……ベルム？ま、まさか、そっちの方に進む気じゃ！？」

「待て。変な勘違いをするな。装飾品を買ったというのはエリアに頼まれたことであって、俺が個人的に買うわけではないぞ。」

「う、うん。そうだと思っていたさ。」

「……………」

「……………?」

「……………」

「あのーベルムさん?」

「……………」

「すみませんでした。もうこの話題については話しませんから許してください。」

「なんだかベルムさんが空を跳めながら危ない人になりそうだったためすぐに謝った。」

「ハハハ、参ったかユウよ。お前をあしらうことなど簡単なことなんだよ。」

「セインさんはあしらえないくせに……。」

「ふ、俺がその気になればあんな心配性DS男には負けることがあるわけないだろ。」

「そうですか?じゃあ、試してみましようか?そのあなたの言う心配性DS男にあなたが負けないかどうか。」

振り向くといつの間にか後ろにいるセインさんとカルロ。

「……………え?……………」

では行きましようとベルムを引きずって行くセインさんと「イヤー
！！」と叫び声をあげているベルムは人ごみの中に消えて行った。
そして残された自分とカルロ。

「セインさんはなんでここに来たんですか？」

「副隊長も道具を買いにね。僕はその付き添いかな。」

「じゃあ、セインさんとベルムは楽しそうですし自分たちは道具屋
に向かいますしょうか。」

「うん。そうだね。」

ベルムが消えてから自分とカルロで人の間を通り抜けること約10
分、自分たちは道具屋の前にいた。

ここに来るまでも同じような店や路上販売などを見かけたがカル
ロによるとそうゆう類の店は不良品を売ってきたり、金を騙し取っ
たりされることがあるらしい。それに比べて今いるところの店主セ
インさんと知り合いで信用できるからここにきたようだ。

「じゃあ、僕はアリアに頼まれたものと副隊長のそれにベルム隊長
のものを買わないといけないからちょっとここで商品でも見せて
待っていて。」

「わかった。」

返事をするに急ぎ足で店内に入っていた。

「さてとなにか自分でも役立てることが出来る代物はないかなあ。」

ん？」

周りを見渡して見た目で使えそうなものを探すと自分に向かって手でこちらに來いと合図してくるお婆さんの存在に気がついた。

「あれは自分に向けて放っているのかな？」

疑問に思ったため左に1歩動くとお婆さんの手は左に動き、元の位置から右に1歩動くとお婆さんの手も右に動いた。

「これは自分だね。」

最初にお婆さんに気づいてからすでに5分ほど経っていたので駆け足でお婆さんの元に行った。

「お婆さんどうしました？自分に何か用ですか？」

「あんた見たところ駆け出しの魔術師のようだね。それも訳ありのものみたいだね。あんたは他のものと違う感じがする。」

(！！何故わかった！？このお婆さんただ者ではない。)

「ほう。その反応、どうやら凶星のようだね。」

「それわかったところで私に何を求めるんです？」

「いや別に何を求めようというわけじゃないよ。あたしはただ品物を買ってほしいだけさ。」

そうお婆さんが言うと何もなかった敷物の上に大小様々な種類の武器や道具、装飾品が突如として姿を現した。

「十分脅迫に聞こえるんですが・・・。」

「ヒツヒツヒツ、大丈夫誰にも言いやしないさ。心配なら何か買っ
ていったらどうだい？今回は安くしておくよ。」

しようがないなと思いつながらお婆さんの商品に目をやる。商品をお
婆さんに説明してもらいながら買いたいものを決めていると敷物の
端にある緑色のクリスタルのような物体の存在に気づいた。

「お婆さん、これは何ですか？」

「それは封印石でね。中には魔力が強い魔物や悪魔などを封じた石
だよ。でもその封印石は普通と違って、よほど魔力が高くてそのま
ま封印が出来なかったのか魔力を枯渇させてから封じたようで封印
されてからも失った魔力を回復するために封印石外の魔力を吸い取
る変わった封印石なんだよ。」

「中で魔力が回復するとどうなるんですか？」

「そんなの決まっているだろ。魔力が高くて封じることが出来なか
ったんだから回復したら封印石を壊して出てくるに決まっているだ
ろ。まあ、駆け出し魔術師のあんたには関係のない代物さ。」

（なるほど魔力を吸い取る封印石か。たしかに関係のない話しだな
）

（待て。）

周りを見渡しているが自分の近くにはお婆さんしかいない。

(あれ？気のせいかな？)

(待て。力ありし者よ。)

(やはり何か聞こえる。)

「あのお婆さん？今自分に何か言いませんでした？」

「いや、あたしは先ほどの説明から一言も話していないが。」

(じゃあ、さっきの声は一体誰の……。)

(力ありし者よ。)

(またこの声だ。お前は誰だ？どこにいる？)

(まだ気づいておらぬか。我は先ほどからお主の前におるであらう。

前と言われてお婆さんの方を向く。お婆さんは不思議そうに首を傾けている。

(そやつではない。下だ下。)

下と言われて下を見ると先ほどの封印石が薄く光っていた。

(もしかしてさっきの封印石!?)

(そうだ。今はお主に念話で話しかけておる。)

(でも何故自分に話しかけるんだ?)

(お主に頼みたいことがあってな。)

(頼みたいこと?)

(それはな……私の封印を解いてほしい。)

「ええっ!?!」

「どうかしたか?」

いきなり声をあげた自分に心配そうな視線を向けてきた。

「い、いえ。なんでも、ないんです。そう独り言ですよ、ハハハ。」

「おかしなやつだねえ」

(ふう。なんとか誤魔化せた。)

(危なっかしいやつであるな。)

(いや、今のはあなたの爆弾発言が原因でしょう。)

(まあ、とにかく話しを戻すが封印を解いてくれぬか?)

(ああ、わかった。)

(そうか、それはよかった。だが本当に良いのか我が先の話しのよ
うに悪魔などかもしれぬのだぞ?)

(いいんだよ。たとえあなたが悪魔などであったとしても今の会話
でああなたが悪い心のものではないとわかったからさ。)

(そうか、ありがとう。封印を解くのは簡単だ。ただ封印石に触れ
てくれれば後はお主の魔力を使って我が封印を破る。)

(わかった。)

「お婆さん、買う品物が決まりました。」

「そうかい、やっと決まったかい。どれを買ってくれるんだい？」

「自分はこの封印石を貰います。」

「いきなりどうしたんだい？さっきまで買う気なんて微塵もない反
応を示しておったじゃないか。でもきつと、それを買うのに何か考
えがあるんだろ？ならあたしは客の買う理由にまで口を出しやし
ないさ。」

「ありがとうございます。じゃあ、それはいくらになりますか？」

「それは本当は金貨3枚と言いたいところなんじゃが今回は初回で
あんなのような面白い若者にも会えたから大負けにお負けして金貨
1枚にしておくぞ。」

「大負けにお負けしても金貨1枚なんですな。」

「それぐらい取らないと商売などやっていけないよ。」

「そうですか？」

「そうじゃよ。」

今路上で老婆さんと全身ローブの男が向かい合ってくつくつと笑っている光景を見ればきつと誰もが怪しがることは間違いないだろうと思った。

「はい。金貨一枚。」

「くつくつくつ、ありがとさん。」

「じゃあ、自分はこれで。」

自分が立ち去ろうとするとお婆さんが呼び止めた。

「あたしの力をあなたが必要とする時にあたしを呼んでくれればあなたに会いにいつてやるよ。」

「その時はよろしく願いしますね。」

お婆さんに背を向けて元いた道具屋に戻る

10話 依頼内容（前書き）

遅くなりすいません。

学校の試験が終わって、
少し息抜きをしていたらこんなに時間が経っていました。

時の流れは速いですね。

10話 依頼内容

泊まっている宿の一室で自分とベルムとカルロ、そしてセインさんで円を書くように座っている。

明日の出発のことを男同士で確認しようということになっている。

「明日王都を出発するみたいですが王都の出た後は何処に何をしに行くんですか？」

「俺たちが依頼で向かうのは王都の南に位置するマハド砂漠内にある水の精霊の加護の受けし国ウィルドだ。」

異世界人のためにこの周辺地域の知識が極端に乏しいので何のことを話しているのか分からないと首を傾げていると、今の僕に気づいたたのかカルロが話し始めた。

「ユウは旅をしているからよく分からないかもしれないから近辺の土地についてと依頼の内容を詳しく説明するよ。」

（良かったー。カルロが察してくれて。）

「ありがとう」という気持ちを込めてカルロに視線を送ると通じたのかニコツと笑顔を返して、また話し始めた。

「周辺地域のことから説明するとここ王都ことハイム王国王都レイグバドルを中心として考えた場合、ウィルドは南東にあるよ。他にもこのあたりには

ここらでは一番の圧倒的な軍事力を有する『バルザレイド帝国』

商工業の名家が集まって国を形作っている『セクルム商工業連合国』
創造神フェラールを祭っている『神聖クラト帝国』
などが存在しているんだよ。」

「へえ〜。それにしても今自分たちがいるこの王都の正式名称はレイグバドルっていうのか。初めて知ったよ。」

その言葉にベルムが驚いたように言った。

「ユウ知らなかったのか!? 俺は領内にいたから国や首都の名前は分かると思って、王都と言っていたのだが・・・。」

(そりゃあ、そうだよな。普通はそんなやついないわな。)

「というか地図も持たずよくここにたどり着いたな。」

「えつと・・・それは。」
痛いところをつかれて、いい説明が見つからないために僕は少し戸惑ってしまった。

すると、今度はセインさんから救いの手が差し伸べされた。

「ベルム、そんなことより早く依頼の詳細を説明しなさい。時間は限られているのですよ。」

「おお、悪い悪い。じゃあ、話を戻すぜ。今回はそのウィルドで過度の干上がりがあった。その干上がりをなんとかするのが俺たちの仕事だ。」

「ですがあそこは砂漠ですし、そのようなこともあるのでは？そもそもウィルドは水の精霊の加護を受けし国、水の魔法を使えば良いでしょうに。」

「それはあちらも直ぐにやってみてみたいだ。だがいくら発動しても魔法が打ち消されてしまつらしい。」

「魔法が打ち消されるのは厄介ですね。僕たちも魔法が使えないのでは作業効率が大幅に下がってしまいますよ。」

上から順番にセインさん、ベルム、カルロと言葉を交わす。

「それは心配要らない。使えないのは水の魔法だけであつて、他の魔法は発動可能のようだ。」

「水の精霊の加護を受けし国なのに水の魔法が使えないのではウィルドの人たちは大丈夫なの？」

「今までの会話で思った率直な疑問を聞いてみた。」

「ウィルドは生活のほとんどに水が使われているため、国家としての機能もあまり果たしていない。以上のことがあり、とても危険のため、万全の準備で現地へ赴き、早急に解決することが求められるので困難な依頼となると思われるが皆全力を尽くしてくれ。以上だ。」

いつもと違ったベルムに少し驚きながらも大まかな話の流れを理解した。

「ベルムもやる時はちゃんとやるんだな。」

「まあ、これでも隊長の位を預かっているからな。」

「その隊長の位を預かっている人がグラニクスに気絶させられるので?。」

「あの時はちょうどグラニクスの繁殖期で気性も荒かったからしょうがないだろ。」

前の森の話などで盛り上がり、依頼内容の確認は飲み会に変貌した。その後、カルロと僕は寝入ってしまったがベルムとセインさんの会話は深夜まで続いたという。

11話 早起きの災難と王都出発 へ前編へ (前書き)

危ない危ない。もう1ヶ月経つところでした。

時間がかかった割には終わるところがまた微妙ですが近日後編も出来上がる予定です。

11話 早起きの災難と王都出発 〈前編〉

目を覚まして上体を起こすと周りにはカルロとセインさんとベルムが寝ていた。昨夜、何があったのか思い出せないで頭の中を整理する。

「・・・昨日はウィルドの依頼についてを聞かされて・・・ああ、そのあと何故か飲み会に発展したのか。」

その記憶が正しいことをベルムから漂うアルコール臭が証明する。外に目を向けると空が藍色から水色に染まりつつあった。

「そっぴえば昨日、ガバンさんが出発前に剣を取りに来て言っていたっけな！」

後で時間をとらないように先に剣を取りに行くことに決めて、部屋の戸を開いた。

「さすがにこの時間には開いていないか。」

昨日訪れたガバンさんの武器屋の前に立っているが開いていない。

「たぶんまだ5時とかそれ位だと思っしな。じゃあ、また出直・・・
・・・灯り？」

武器屋の方は閉まっっていて閉店状態だがその隣の工房の戸から灯りが漏れているのが目に入った。

「ガバンさんが起きているのかな。」

工房に近づいて見つけた隙間から中を覗く。だが中には誰もいない。

「全く不用心だな。これじゃあ、泥棒に入ってくれと言っているよ
うなものだぞ。」

泥棒に入られないように店番をしようとして工房内に足を進めると、その瞬間。

ズバン！！

「・・・ん？」

入り口の横にあった甲冑が持っていた長い柄の戦斧が目の前に刺さっていた。

「！！・・・危ないなあ。ちゃんとこういうものは固定しないと怪我したら大変だろうに。うい・・・っしょっと。」

床に突き刺さった戦斧を持ち上げて元に戻すため、甲冑に向き直ると甲冑は片手をこちらに差し出してあちらも自分を見ていた。

（さつきこの甲冑をみた時と明らかに甲冑の体制が違う。先ほどは直立に立ち、戦斧を傍らに置いた形であったはずなのに体制が変化しているのは人為的に動かされたかもしくは“この甲冑が動いた”か。後者は有り得ないと思うが何事もものは試した、まずは質問を試してみよう。返事が無ければ前者、返事が有れば後者というわけだ。）

「この戦斧は君のかい？」

「ガチャガチャ」

謎の甲冑は人体で表される首の部位が無いにも関わらず、兜を縦に振った。きつとこの甲冑なりのOKサインなのであろう。

（！！・・・まさか！？本当に動いた！？そんな・・・呼びかけに反応する鎧があるなんて。いや、これはたまたま風や振動で甲冑の鎧が揺れ動いたんだ。きつとそうなんだ。）

甲冑は先ほどと同じ体制で片手を差し出している。自分は甲冑が目は存在しないが「返してくれ」と訴えかけているように思えた。

（そうだったな。ここは魔法が存在する世界。その世界で僕が魔法の無い世界で得た知識はあまり役にたたないんだったな。で、これはこいつのものなんだった。ここは友好的にいきたいからな。）

「・・・はい。」

自分の得物を返してもらった甲冑は「ありがとう。」という念を込めてか頭を下げてきた。

「さてとガバンさんはいないみたいだし、一度みんなのところに戻

って開店時間にまた来るとするかな。」

出直すために出口に向かおうと振り返る。すると今までであった鎧の周りの空気重くなり、また

・・・ズダーン！！

「ん？」

また自分の横に今度の一撃は重く戦斧が振り下ろされた。衝撃で床は窪み、木くずが辺りに飛び散る程だった。

「え、・・・ええと？」

また鎧くんのことを見るとついさっきの友好的なオーラは何処へやら、今の鎧くんは命令に忠実で冷酷な騎士のようなオーラを身に纏っていたのです。

「ん~~~~、はあ。おっと、もうこんな時間か？」
ベルムよりも早く起きていたセインは言った。

「そうですね。なにをのんびりとこんな時間まで寝ているのです。あなたは一応は私たちの隊長であるのですからもっとその自覚を持ちなさい。」

「いや、悪い悪い……っていつかそこは起こしてくれてもいいだろ!？」

「そこで私が起こしてしまったら、あなたはひとに起こしてもらわなければ起きられない人間になってしまうからですよ。」

ベルムに対して「バシィィ!!」という効果音が鳴るかの如く素早く指を指しながら言った。

「でもそれならカルロだってそうだろ！」

ベルムの目線の先にはすうすうと寝息をたてて寝ているカルロの姿がある。

「カルロはあなたと違い先日から準備もしているんです。それに引き換えあなたは何もせずに酒を飲み、そしてこんな時間まで……」

「はいはい、そうですねかそうですねか。」

……トントン

「?…なんだなんだ、こんな朝っぱらから客なんてどこの礼儀知

らずだ？」

ベルムは早朝の来客に少し苛ついた様子で扉を開けた。

「はいはいこんな朝早くから人の所に来る礼儀知らずはどこのだれ・
・です・・・か。」

「俺が朝早くから人の所に来る礼儀知らずで悪かったなあ？」

「・・ガ・・ガバンのおっちゃん!？」

「フッフッフ、人の悪口を言う子にはお仕置きしないとなあ。」

危ない笑みで歩み寄るガバンからベルムは逃れようと試みるが入口にはガバンがいるため突破は困難、とはいえ窓の前にはセインがいて、またこちらにも笑みを浮かべて見ている。結論、脱出は不可能だとベルムは思った。

「お、おっちゃん待ってくれ、ぐはあ。誤解なん『ゴキツ』ぎゃあ
ああ!・・・セ・・セイン助けて〜!!」

「ふふふ、微笑ましい光景ですね。」

「くっ、悪魔め・・。」

「まだ俺にそんなこと言う元気があつたとはな。」

「違う、違うんだ。それはおっちゃんにじゃなくて、いやああああ
!!!」

その後、床に倒れ伏しているベルムを気遣ってかやっとセインが助け舟を出した。

「ところでガバンさんはどのようなご用件で来られたのですか？さすがにベルムと戯れるためというわけではないでしょう。」

「おっと俺としたことがこいつのせいで来た理由を忘れていたぜ。実は昨日頼まれた剣が完成したんだが本人に合うか点検が必要でな。その最終確認をするために来たんだがユウはいるか？」

「そうすれば私たちも見えていませんね。」

「どうしたんですか？」

今まで寝ていたカルロがまだ眠たそうに目を擦りながら聞いた。

「カルロ、起きたのですか。今、ユウくんがどこに行ったのか聞かれていたところだったのですよ。」

「ユウくんはたしかガバンさんのお店に向かうと言っていましたよ。」

「ああ、そうですか。だそうですが・・・？ガバンさんどうかしましたか？顔色がよろしくありませんよ？」

「俺は大丈夫なんだがその話が本当ならばちょっとヤバいかもしれないな。」

「なにがヤバいのですか？」

「なにも起こってなければいいんだが、もしものことがあるかもしれないからちょっと一緒に来てくれ。」

序盤は動きが遅かった鎧くんは時間が経つに連れて、もつと遅くなると思いきや動きは徐々に素早くなり、戦斧での攻撃にはキレが出てきているのが見てとれる。だが今のところは昨日謎の老婆から買った意識を持つているクリスタルの念話で攻撃をかるうじて回避出来ている。

（次は左！）

（うん！）

僕の体の存在していた場所に戦斧は高速で落ちていき、床に深く突き刺さる。だが深く刺さった戦斧を持ち上げるため少しだけ鎧くんの動きが止まる。

（今だ！あいつの鎧に火の魔法を放ち、あの邪魔くさい装甲を溶かせ！そうして剥き出しになったやつを核を壊せばこの勝負、我らの

勝ちだ。)

(了解。)

「フレム！フレム、フレム！」

まだ魔法の使用に慣れていないので力加減が上手く出来なく、小さな炎の玉が2つと大きな炎の玉を1つ放出した。だが割と命中率はいいのか全発命中した。

ジュウウウウ

この世界の鎧などがなにで作られているのかはわからないがこの炎で鎧が溶けているところを見るとこちらの世界の製鉄技術はあまり進歩していないと思えた。

「それとも僕の放った炎の火力が高かったのか？」

(なにをぶつぶつ言っているのだ。まだ奴は倒れておらぬぞ！)

(い、ごめん。)

(まあ、よい。とにかく奴の鎧の融解部分を見る。)

言われるがままに自分の炎で溶けた鎧の内部を確認すると中では紫色の光を放つ六角形のような見た目がガラスにそっくりな物質が回転していた。

(あれが核？)

（そうだ。あれが奴らの動力源であり、唯一の弱点である部分だ。）

（ということとはあれを破壊すると……。）

（そう。奴は動力源を失って動けなくなり、我らの勝ちだ。）

11話 早起きの災難と王都出発 〈前編〉 (後書き)

誤字脱字がありましたらお知らせください。

不定期更新ですがこれからもよろしく願います。

12話 早起きの災難と王都出発 〈後編〉 (前書き)

ミッウロロです。

PV 14000突破！ ユニーク 4000突破！

こんなに不定期更新なのに見てくださる方がいて嬉しいです。(ノ
ー、)

これからも更新頑張ります。

12話 早起きの災難と王都出発 〈後編〉

「じゃあ、これが最後だな。」

僕は傍に置いてあった剣を手に取ると駆け出した。狙いは鎧くんの中で光輝く核ただ1つ。

だが僕が鎧まであと一歩のところまで近づいた時突然、核が強く光り出した。すると相手の手には戦斧が握られており、両手で戦を振り上げて僕を叩き切る体制をとっていた。

ここで僕は鎧が今まで動かなかったわけを理解した。

(そっか、動けなかったわけじゃないんだ。確実に獲物を仕留めるために機会を窺っていただけなんだ。ちゃんとここまで考慮しておくべきだった。)

悔やむが遅い。ここはもう相手の攻撃圏内、今から後退したところで戦斧を振り下ろされて終わる。だが核を破壊出来れば、鎧は戦闘不能にできるが核を破壊されて鎧に力は宿らなくなる。すると鎧の持っている戦斧は滑り落ち、あとは重力に従って核を破壊した直前の体制の僕に落ちてくる。が、僕はこの体全体を隠す程のローブを身に纏っているため避けるのは難しい。

(でもこのまま何もせず終わるのは嫌なんだよね。)

(いざという時には我がついている。安心しろ。)

(うん。そつだね。)

「か、覚悟!」

僕が核に剣を突き立てると同時に鎧も戦斧を振り下ろす。

・・・パキイイン!!

核が割れると同時に中から大量の魔力が漏れ出し、その際の閃光が僕の視界を一瞬奪う。

「うわっ!?!目が!・・・っ!!」

(ユウよ、上からくるぞ!早く避けぬか!さもなければ本当に“死ぬぞ?”)

「・・・えっ?」

クリスタルからの念話を聞き、すぐに上を確認すると僕の顔の数センチ前には降下してくる戦斧が存在していた。

「う、うわああああ!!」

(もうダメだ。いくら鎧を倒したとはいえ今の僕の力での戦斧を防ぐ術は・・・ない!)

怖くなり、俯くユウ。あとユウと戦斧の距離・・・25・・・20・・・10。もう当たると思ったその時。

カキイイイン

金属と金属がぶつかり合うような音。それは室内に響き渡り、数秒としないうちに消えた。

「……一体何が起きたんだ？……今も僕が生きているということはあの戦斧はどこにいったんだ？」

ふと周りを見回すと自分の後方に刺さっているのに気づく。

(ユウよ！おぬしは本当に駆け出しの魔術師なのか！？)

(どうしたの？いきなりそんなこと。)

(……今、おぬしにあれが落ちて当たりそうになった時に何やら強力な結界のようなものが現れて、おぬしをあれから守ったのだ。あのような結界は駆け出しの魔術師が造れるものではない。)

ユウは異世界にうかれていて大事なことを忘れていた。

この世界に来る前に自称神様が約束してくれた3つのお願い。

1．黒魔法を使えるように

そして2と3が………多重の障壁と物理的衝撃に強いロープ

(2と3をすっかり忘れてたー！！)

(で、これはどう説明してくれる？)

（あーえー、それはあれだよ。そのこのローブに結界みたいなのが発動する効果が付与されているかんじだよ、ははは。）

（あのような効果が付与されていると言うのかこのただ黒い法衣にだとすればこれは相当な値のものだと思うのだがまさか盗んだか？）

（えっ！？そんな失礼な。これは単なる貰い物だよ貰い物。）

（貰い物、とな？）

疑わしそうな声で聞いてくる。

（・・・む、人が来るな。今一度、念話を切るぞ。）

ごまかしが効いたのに安堵を感じているとタツタツタツ、と駆けて来る複数の足音を聞き取った。近づいてくる足音がセインたちのものだ気がつくのにそんな時間はかからなかった。

「ユウくん！大丈夫かい！」

「坊主大丈夫か！？」

セインさんたちが入ってくるとセインさんとガバンさんの声が室内に響き渡った。

「ええ、僕は何ともないですけど。」

「それは良かった。だがここには防犯のゴーレムがいたはずだがあいつはどうした。」

「それならあそこに・・・。」

勝手にゴーレム壊してしまったことに罪悪感を抱きながら倒れているゴーレムを指差す。ガバンさんはゴーレムに近づくとしゃがみこむ。

「いやーあの、これはそのいわゆる正当防衛でして、僕は悪くないというか。でも僕が勝手に入らなければこんなことにはならなかったと思うので僕にも責任があるのもまた事実なわけで。」

「ほーお、こいつを坊主が一人で倒したのか？」

「あのその……お店をこんなに散らかした挙げてゴーレムまで壊してしまい……ほ、本当にすいませんでした！」

（うう、流石にこれはどうしようもないよ。自分の時いた種、身から出た錆だし素直に誤ろう。）

と以上のことを思っているといきなりガバンさんが笑い出した。

「え、え？あの……。」

「そんなに気にしなくても大丈夫だ。確かに坊主が入ったからこいつが働いてしまったが昨日、今日届けると伝え忘れた俺にも非はあるしな。」

「で、でも……それに……？」

そついうと背中に背負っていた細長い箱を下ろしながら言った。

「それにこの俺の作ったこれがお前に使いこなせるかどうか心配だったのだが魔術師の身であるお前が俺のゴーレムを倒せたんだ。き

「っとお前の役に立つてくれることだろう。」

ガバンさんが持ってきた箱を開けると中には全体的に灰色の剣が入っていた。普通と違うのはその刀身の長さ、刃渡りは180?にも及ぶ長剣の域を超えた長剣なのである。

箱から出された剣を見たセインは驚愕の声を漏らした。

「なんですか!?!この剣は。槍にも引け劣らない長さですよ。」

「こいつの名は『カダウン』だ。長いが硬化の魔法がかかっているからまず簡単には折られない。あとこいつの最大の特徴である刀身の長さでただ横に剣を尻払うだけでもその攻撃可能範囲は半径2mを超える。」

そこまで話したところでセインさんは質問を出した。

「それではこの剣には弱点がないということですか?」

「いや、こいつにも弱点はある。刀身が長いいため小回りが効かないのと全体が大きいからどうしても大振りになるため隙が多いところだ。」

「正に諸刃の剣ですね。」

「俺も頼まれた時は驚いたぜ。こんなものを使うのは魔物でもそうはいないからな。それにしてもなんでこんなものを作って欲しいと思っただんだ?」

「それは………」

王都中央門前

空は星空から青空に変わり、東からは朝日が顔を出している。

「ユウさんとセインが遅いね。」

「何かあったのかしら？」

カルロとアリアがユウたちのことを心配する。

「ふっ、あの変態悪魔などどこかでくたばっていてくれれば俺にとつては都合のいいことだ。」

「ベルムあんた……懲りないわね。……!!……後ろ。」

「どうしたの？そんなに顔を強ばらせちゃって。後ろになにかいるの？きつと虫か何かで・・・しょ・・・。」

微笑むセインと固まるベルム。僕はこれと同じ光景を前に一度見たことがある気がする。

「ねえ、ユウくん。どうしたの？遅かったけど。」

「武器を取りに行っていたら、ハプニングに巻き込まれちゃって。」

「そっかあ、大変だったんだね。」

そこに事を済まして戻ってきたセインさん。

「セインさん、ベルムとは終わっただんですか？」

「はい。あいつは少し早いですが天に召されました。」

「そうですか。じゃあ、出発はどうします？」

「それに関しては予定通りに行きますよ。これ以上遅れるわけにはいけませんからね。」

このように僕たちの旅は始まったのでした。

12話 早起きの災難と王都出発 へ後編へ (後書き)

誤字脱字がありましたら、

報告してくださると幸いです。

13話 精霊の血族(前書き)

ミシウロロです。

いつもと同じく書いていたら、早く書き終わってしまいました。

いつもは書いていてもあまり進まないのにな。

この差はなんだろう？

13話 精霊の血族

マハド砂漠を目指して町や森などを通り、南に20キロ程は歩いた
だろう。周りは荒れ地になっている。

「あの、セインさん。少し・休みま、せんか？」

セインさんたちは長く歩くのに慣れているのか息一つ漏らしてい
ない。でも僕は違う。ただどこにでもいる高校生だ。それにこの格好
長くて少し重たいローブを着ているため足取りも遅い。ただローブ
にカダウンをしまえる程の収納性があったのが不幸中の幸いだ。(
しかしこのローブの構造が全くよく分からない。何故薄っぺらい布
に物が入るのか?)

「そうだね。けっこう歩いたし、そろそろ休憩を挟んでもいいと思
いますよ副隊長。」

「そうですね。ここからもう少し行ったところに川があります。そ
こで休みましようか。」

少し歩くと川が流れていると思われる場所に着いた。

「川……無いですよ。」

やっと休めると喜んだ矢先の今この状況、絶望感は計り知れない。

「確かに前来た時はあったんですけどねえ。」

見渡す限り、岩、岩、岩。川らしきものは見当たらない。特に気になるものといえば堀のようなものがあるだけ。

「この堀が川だったんじゃないかな？」

カルロがいつもと変わらぬ笑顔で言う。

「そのようね。魚の骨のようなものも見えるし、場所も一致なら間違いと思うわ。」

「そのようですね。多分、ウィルドの干上がりがこちらにも影響を与えているでしょう。この辺りの川や水路の水は全てウィルドからきていますからね。」

そこで僕は今まで考えていたことを聞いた。

「ここまでで思ったんですけどウィルドとはどんな国なんですか？」

「ウィルドとは水の精霊が国全体に宿る国だよ。ウィルドは昔から水を愛し、水とともに生きてきた国なんだ。ウィルドは元々、ウンディーネなどの水の上級精霊が何もなかったこの土地に興した国なんだよ。昔は水も随分と重宝されたみたいだし、当時不治の病と言われた病気を水の精霊は治してくれたことに今も感謝しているため水の精霊を国の守り神として祭り上げているんだ。」

「へえ。そうなんですか。それにしてもカルロがそんなに話す人は思いませんでしたよ。」

僕が言ったことに何がおかしいのか分からないがカルロとセインさ

ん、そしてアリアさんの僕以外の三人がクスクスと笑い出した。

「?どうかしました?何か僕変なこと言いました?」

「それはね」と笑い終えたアリアさんが僕に理由を教えてくださいました。

「それはね。カルロがその水の精霊の『血族』だからよ。」

「え?ええーっ!えっでもカルロはどこからどうみても人じゃないですか!?!」

「だから言っただじゃない。カルロは血族、だから血の繋がりはあるだけで列記とした人間よ。」

「でもさっきウィルドは水の精霊が興した国だって……。」

ここで当の話の本人であるカルロが答えてくれた。

「確かに昔はそうだったんだけど歴史が流れるにつれて人とも関わりを持つようになったんだ。あそこは海と川も近くにあるから貿易の拠点にもなるから、いろいろな種族と交流を深めることは自分たちのメリットに繋がるからね。でも今も国の上層部は国を興したウンディーネなどの上級精霊の血族が国を動かしているんだよ。」

「な、なるほど。」

「だからそんな水の上級精霊が守り神としている国が普通干上がることは有り得ないんです。わかりましたか?」

「わかりました。でもここでこの様子だとすればウィルドはもう……」

「。。。」

考えたくはないが今自分たちがいる場所での被害だ。ならばこの先のウィルドが無事という可能性は極めて低いと言える。

「そうですね。これは休んでいる暇はなさそうですね。」

「でも先に行かせてくれそうもないみたいよ。」

「みたいだね。」

「何がですか？」

「ユウ君は気がつかないかもしれませんが今私たちは囲まれていますよ。たぶんウィルドが緊急事態でこのあたりの警備が手薄になったところを狙い、この干上がりで疲労困憊の旅人や商人を襲うつもりの盗賊かなにかでしょう。」

盗賊がいるという指摘に内心びつくりしながら自分たちの周辺を索敵するとあまりはつきりとは見えないが動く影がざっと十五程確認できる。

「でも幸いなことにあちらは私たちを騎士団の者とは気づいていない様子です。」

「でもあの人数よ、ただ突っ込むだけでは背中を取られてしまうわ。」

「だからこの場合は敵を攻撃可能範囲まで近付けさせてから叩くのが有効ですね。」

セイン、アリア、カルロとテンポの良い作戦会議。

「でも簡単には敵は引き付けられないのよね。」

ここで僕は思いついた。いや、思いつかされたと言った方が良かったかもしれないが思いついてしまったのだった。

「では誰かが囮になればいいんじゃないですか？」

「なるほど。そのてがありましたか。ではユウ君、」

「「「君が囮になってくれませんか？」「」」

（うわゝ、ベルムの役回りが僕にきてしまったかあ。）

このとき、僕は初めてベルムの存在を必要とした気がした。

14話 困はつらいよ(前書き)

前半はいい感じだったのですが後半は登場人物の多さから、グダグダになってしまいました。

読みづらい場合はすみません

14話 囷はつらいよ

バルザ視点

俺はバルザ。盗賊団の団長をしている。最近のところ長期間の日照りで雨が降らないため、荒野では旅人や行商人が疲弊し易くなった。だから俺たちはただその瞬間を狙えばいいから楽だ。

そして今日もその方法で金品を奪おうと仲間と荒野を散策していると仲間の一人が叫んだ。

「旅の者と思わしきやつを発見しやした！。人数は・・ひい、ふう、みい、四人！うち二人は武器所有が確認できるっす。」

相手の人数は四人に対して自分たちは総勢十五人、全員でかかれば勝てるかもしれないが何分こちらの武器は盗品や安物ばかりで耐久性に欠ける。相手の武器の質と腕の良さ次第では返り討ちに合うことも考えられる。この大人数で戦闘を行うにあたって上に立つ者はどれだけ被害を被らないで安全かつ確実に目的を遂行させなければならぬ。標的の人数が少ないからといって油断してはいけぬのだ。

「よし相手が四人だからといって油断するな。標的からある程度離れながら包囲するぞ。そして相手がくたばる、もしくは疲弊したところを襲つぞ！」

言った作戦に同意する一同。

標的を囲んで少し経つと仲間から再び報告があった。

「大変っす大変っす!!」

「今度はどうした？なにか問題でも発生したか？」

「それが四人のうちの一人が倒れたっす。でもあとの三人が突如姿を消したんだっす!？」

俺は今こいつが夢を見ていたのではないかと部下の言葉を疑ったが実際に距離を保ちながら見てみるとローブを纏った一人が倒れているが他の武器を携帯していた男たちは姿を消していた。

「……一人が倒れたのは予想通りだがあとの三人は何処へ行ったんだ。ここは十五人で三人を取り囲んでいたんだぞ!？」

「信じられませんが消えたことは確かなので……どうしましよっ?」

「少し怪しいがここまで来てこのまま怪奇現象で利益無しで帰るわけにはいかない。少数で倒れたやつを物色、残りは消えたやつらを搜索だ。」

ユウ視点

今僕は灼熱の太陽が照りつける高温の地面に故意に倒れ伏している。
現状に至ったのは十分くらい前に僕が言った言葉のせいだ。

十分前

「では誰かが囿になればいいんじゃないですか？」

「なるほどそのてがありましたか。」

「ではユウ君が囿になってくれませんか？」

（ああ、言わなければ良かったな。）

「え？僕がですか！？でも僕はそんな戦闘も強くありませんし、それに僕が囿になってもセインさんたちが健在ならあちらも寄って来ないんじゃないか……。」

「大丈夫ですよ。私たちはアリアの魔法で姿を消して敵を各個撃破しますからその間ユウ君は自分の近くにやってきた敵を倒せばいいのですよ。こういう時のために作って貰ったカダウンじゃないですか。」

そうガバンさんにカダウンを作って貰ったのはなんとなくではない。僕は近接戦が苦手のため、剣を長くして相手との距離が長くても攻撃が可能だからだ。普通はこれだけの長さがあるとその重量感で持てないがこちらの世界に来てから身体能力が上がっているため、僕の戦い易い範囲の攻撃が出来るカダウンのような武器を選択した。

「ちゃんと武器を使ってあげなければいけませんけど……。」

「ではユウ君、君がやらなければ誰にやらせるつもりでその意見を出したのですか？」

（それはアリアは女性だから囿にするのは危ないし、カルロはいつも優しく話していて楽しいから個人的に囿には出来ないから自動的に……。）

アリア　カルロ　セインの順に顔を見ると最後に見たセインさんの眉がピクピクしながら笑っているのがわかった。

（「自動的にセインさんです！」なんて言えないよな。）

「ハア。わかりました。僕が囿になります。」

「そうですね。じゃあ、さっき言った流れでお願いします。」

「ユウ君頑張って。応援しているよ。」

「じゃあ、頑張つてね。」

とそれぞれ言葉を残し、魔法によって姿を消した。

「さて、僕も囃役を始めますか!!」

というような過程を経て、今の僕の状態に至るわけです。

「はあ、本当に囃役が僕に務まるのかなあ。」

(ユウよ。)

(あつ、どうしたのクリちゃん?)

(ちょっと待てユウよ、一つ聞きたいがクリちゃんとは誰のことだ?)

(それは君のことだよ?クリちゃん。)

(何故だ!!何故私にそんな名をつける!!)

僕の思いついた名前が気に入らなかったのか大きな声?で叫びだす意識のある封印石。

(だってクリスタルや封印石といちいち呼ぶのはなにかと酷だしさ。あとクリちゃんならかわいいじゃん?)

(かつ・・・かわいいだと!?!?!?!だが私にもプライドというも

のが。。。）

（そっかあ、嫌かあ。クリちゃんだったら、きっと似合っと思ったのになあ。）

（！。。。ユ。。。たい。。。ぞ。）

（？どうしたの？なんて言ったのか聞こえないよ？）

（っ！。。。ユ。。。ユウが呼びたいというのなら、呼ばせてやっても構わないぞ。／＼／）

念話から恥じらいのようなものが感じられるが何に恥ずかしいと思っ
ているのかが分からない。

（別に嫌なら無理しなくてもいいよ？）

（いや、無理などしていない。ユウが決めてくれたんだそれで構わ
ない。）

（そう？じゃあ、改めてこれからよろしくね、クリちゃん。）

（ああ、よろしく頼む。ところでユウ、ユウは『囹』というものが
何か知っておるよな？）

（そりゃあ、わかっているよ。仲間が行動するうえで相手の注意を
引きつけて、仲間が行動し易くする役だよな。）

（そうだ。そして注意を引きつけるということは当然敵が囹に集ま
ることだよな？）

そんなの当たり前だと思っ僕

(そうだね。)

(それで今、盗賊が三人ユウのもとに近づいているのだが・・・)

(え?)

相手に生きていることがバレないように静かに顔を動かし、纏っているロープで隠れている目から周囲を確認する。すると前方から先ほど聞いた三人が直ぐそこまで接近してきていることに気づいた。

(ヤバ～～～イ!!どうしようどうしよう!!?ク、クリちゃんもなんでもっと早く知らせてくれないの??)

(それは説明しようとしたらユウが私のことをクリちゃんと呼んだからついさっきの話になって遅くなったのだ!)

そこに三人の盗賊が現れる。

「ああ～暑いなあ～このやろう!」

盗賊の一人が地面に剣を打ちつける。

「ほら!剣に当たるな!あと暑いって言うなもっと暑くなるだろ!」

「儲かるのは嬉しいがこの暑さはなんとかしてほしいものだな。」

「そうだな。じゃあ、さっさと物色して引き上げるとするか。」

そうして倒れている僕に近づくと盗賊三人組。

（やらせる前に先制攻撃だ。）

「フレム！」

その瞬間、盗賊三人組のうちの一人の頭が燃えた。

14話 困はつらいよ(後書き)

誤字脱字がありましたらお知らせをお願いします。

15話 炎のクールロスト作戦 〈前編〉 (前書き)

ミツウロコです。1ヶ月以上もお待たせして申し訳ありません。

未だに戦闘シーンを書くのに慣れないもので・・・(x|x;x)

そして相変わらず短いことについてはご理解をお願いします。

15話 炎のクールロスト作戦 〈前編〉

盗賊の不意をついて放ったフレムは今まで暑いと言っていた男の顔に命中する。

「ぎやああああ！！熱い、熱い！水水水水水ー！！」

「あ……えと……」

「うわああ！！火、火が顔についていて顔が火であわわわ。」

いきなり仲間に攻撃魔法が放たれて状況が掴めず混乱する二人。

「はっ、そうだ水だ！クルス、水の魔法を使うんだ！」

「あ、ううん。わかったよ、イヤル。『ウォーターボール』！！」

三人の中のクルスと呼ばれた魔術師が魔法を唱えると手から巨大な水の玉が現れ、燃えている味方に向けて放たれる。

「熱い熱い熱い『ブバシャアア』……寒……いつ。」

ドサツという音と共に倒れる男。どうやら熱さから解放されて安心したのか気絶してしまっただけらしい。

「こいつはまず大丈夫だとして先ほどの魔法はどこから放たれたものなんだ！？」

「近くには僕たちと屍しかいないから……屍？」

「まさか！」

気づかれたこと気づきながらも今度は二人のなかで強そうな男を狙い同じだけの力で魔法を放つ。

『フレム』

僕の手から放たれたフレムは男に当たる『はず』だった。

「くっ！」

放ったフレムは男に当たる直前で左右に分かれた。正確にはフレムは男に当たる直前に斬られたのだ。

(そんな・・・魔法を剣で斬るなんてそんなことができるのか！?)

突如目の前で起きた事に驚かされている自分に剣士の男は話す。

「まさか俺が不意打ちを受けるとはな。だがもうそのやり方は効かないぞ？」

バレたからにはしょうがないとイヤルという男の呼びかけに応える。

「やっぱりバレますよね。でも一人は倒せることが出来たし、奇襲を仕掛ける意味はあったようなので良かったです。」

「それはこいつがアホだったただけだ！」

イヤルは気絶した男を指差しながらいう。

「それにしても僕の魔法をさっき斬りましたよね？率直に聞きますけどどうやったんです？」

「そんなことを敵である魔術師に言っわけないだろう。聞きたければ俺を倒して見るんだな！」

それだけを言うと剣を引き抜いてこちらに向く。そのイヤルにもう一度同じ魔法を今度は強めに放つ。

『フレム！』

「だから効かめと言っているだろうがあ！」

ブンツと剣を振るうとまたしても炎の球が真つ二つになって消えた。

（クリちゃん！）

（どうした？大声だして。）

（今闘っている剣士が僕のフレムを斬ったんだけど……どういうこと？魔法って斬れるものなの！？）

（……フレムを斬った時、炎の球は斬った後どのなった？）

（なんか斬ったら炎が消滅したというか、かき消されたというか……）

（そうか。では炎を斬った時に相手はやけどなどを負っていたか？）

(いや、やけどどころか衣服に燃え移ってもいなかった。)

(なるほど。ふふ、一介の盗賊風情がどこで手に入れたのやら。)

(何かわかったの?)

(ああ。あれは。)

イヤル視点

魔法で不意をついてきた魔術師は少し黙った。

(やっと俺に勝てないとわかったか。魔術師は俺に勝てるはずがないんだよ。)

「フレム！」

(またその魔法だと!? 学習しないやつが! だから)

「俺に魔法は効かないんだよ!!」

向かってくる炎の球を斬り、魔法を消滅させる。

「ほらな、効かない・・・なに？」

イヤルがフレムを消滅させると消滅させたフレムの後ろから別のフレムが現れた。その後も消滅させるとまた別のフレムが現れ、そのフレムを消滅させるとまた別のフレムが同じ魔法が繰り返し放たれ始めたのだ。

(クソ、何を狙っているんだあの魔術師は?)

ここまで連続して魔法を放たれては斬った後の体制を立て直すことが難しい。いくら魔法を消滅させることが出来ても剣に当てることが出来なければ意味がない。

(そうか！お前が狙っていることは何度も連続的に魔法を放ち、俺が疲弊するのを待っているんだな。)

「そんな簡単な策に引っかかるかよ。」

今度は放たれたフレムを斬ると同時に走り出して魔術師との間合いを詰める。たいてい魔術師は中距離、遠距離での攻撃が得意であるが逆に近距離での戦闘は魔法の発動にかかる時間が確保できないなどがあるために苦手とする。

そして今回の場合は魔法を連続して放っている点から魔力値が高いことが分かり、魔力値が高い魔術師は魔法を主力で遠距離魔法で長期戦に持ち込ませるため、相手にする時は素早く相手の懐に入り短期決戦を狙うことが良いとイヤルは考えたのだった。

自分が迫ってきてても構わずフレムを放ち続けている魔術師にフレムを消滅させながらどんどん間合いを詰めていき、魔術師から数メートルしか離れていないところで今放たれたばかりのフレムを消滅させる。

「ほらよ、もう俺はお前の目の前だぜ！」

最後のフレムを消滅させてから魔術師に向かった言葉だったが放った先に魔術師はいない。

その瞬間、俺の横腹に激痛が走った。見ると先ほどの魔術師がその手に持たれた剣が当たっていることに。

15話 炎のクールロスト作戦 〈前編〉 (後書き)

誤字脱字がありましたら、連絡ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6415r/>

異世界の旅人

2011年11月16日23時45分発行